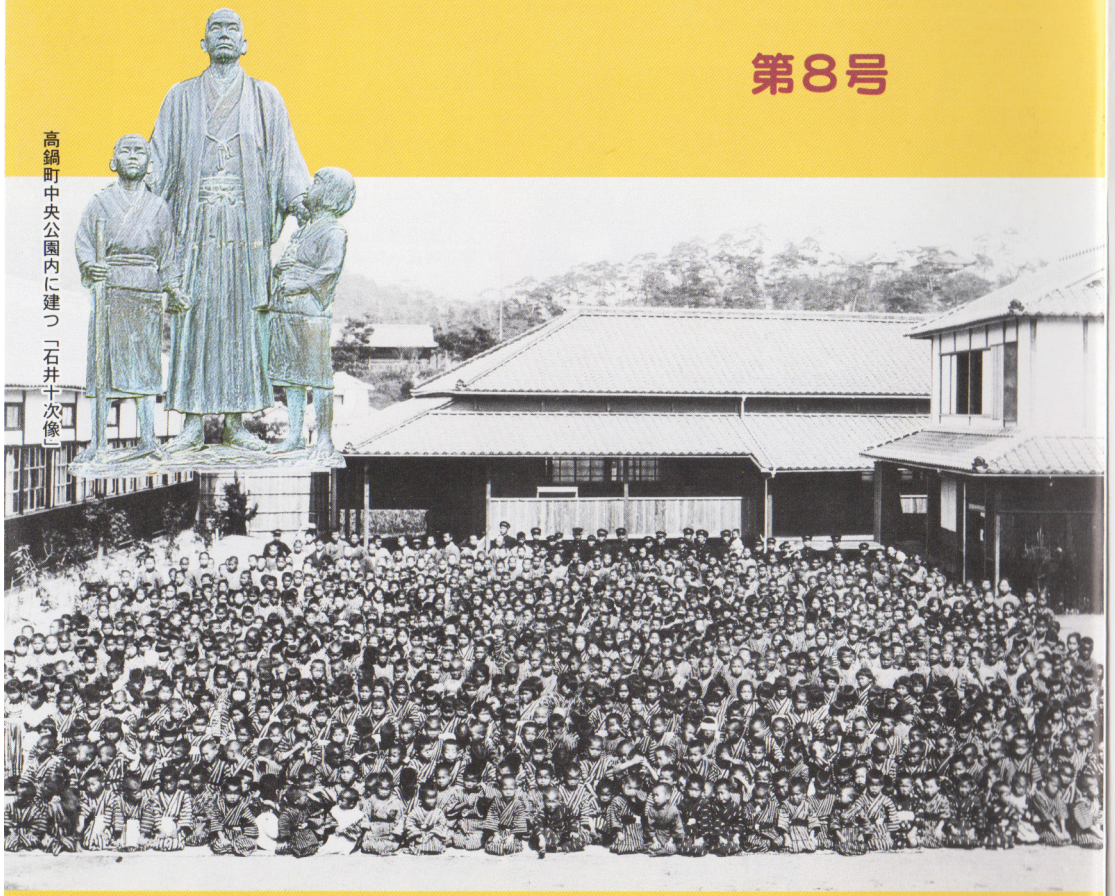
石井十次顕彰会だより

第8号



高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」

財団法人　石井十次顕彰会

石井十次顕彰会事業内容に「福祉施設へ賛助金贈呈」という項目があり今年は、次の施設へ送られた。

福祉施設賛助金を三股町樺山の「さつき共同作業所」へ

中村行義様から尾崎理事長へ寄附贈呈

福祉教育賛助金を高鍋西中学校へ

増田秀文様から寄附贈呈

募金者報告第八号

平成十年四月一日
平成十一年三月三十一日

篤志寄付

高鍋町　立正佼成会高鍋支部　(代)久保勝代様
〃　館野キミ様
〃　増田工務店㈱　(代)増田秀文様
〃　岩永高徳様
〃　黒木本店㈱　(代)黒木敏之様
〃　森下文明様
〃　今村幸男様
〃　坂本実業㈱　(代)坂本博文様
〃　創建設計事務所　(代)井上博功様
〃　石井秀隣様
〃　高鍋郵便局　(代)宮内信秀様
門川町　旭マルイガス㈱　(代)甲斐久光様
串間市　木島正之様
宮崎市　印刷センタークロダ　(代)原田安政様
〃　矢野一彌様
〃　タイコーグループ　(代)中村行義様
〃　山崎株式会社　(代)山崎正晴様

忌明寄付

高鍋町　長尾　輝様
〃　渋谷　イク様
〃　佐藤　密様
〃　岩永　高徳様
〃　谷川　陛紀様
〃　橋本生一郎様

このたびは、多額のご寄付をいただき誠にありがとうございました。厚くお礼申しあげます。

あとがき

皆様のご協力のもと顕彰事業も年毎に広く深くなって参りました。「石井十次顕彰会だより」も全町民にお届けして以来第8号となりました。ご家族みなさんでごらん下さい。

発行者：石井十次顕彰会
題　字：宮崎県知事　松形祐堯
印　刷：㈲印刷センタークロダ
発行日：平成11年3月31日

石井十次顕彰会だより

第七回 石井十次賞

加賀美 日聰氏へ
平成十年四月十一日石井十次生誕記念式典当日に正賞「楯」と副賞が贈られた。

第７回石井十次賞として社会福祉法人山梨立正光生園理事長加賀美日聰氏が決定したことを報告される選考委員長福田垂穂氏

尾崎理事長より加賀美日聰氏へ賞状が手交された。

施設の要所にかかげられている「子にすぎたる財なし」の園訓

謝辞を述べる社会福祉法人山梨立正光生園理事長加賀美日聰氏（89才）

受賞者
社会福祉法人山梨立正光生園 理事長
加賀美 日聰 氏

若くして山梨県甲府市の宝塔山遠光寺第四十四世の法灯を継承した氏は昭和九年の季節託児所開設以来現在まで、半世紀以上にわたり継続して児童福祉事業に尽力している。

「子に過ぎたる財なし」との信条を児童養育の根幹として貫き、乳児院、保育所、養護施設、母子寮、授産所等総合児童福祉施設の充実につとめた。

戦時下の同地域は、比較的低所得の人々が生活し、又中小の生糸工場がありそこで働く女子工員がおり、また農村（ぶどう、なしが特産）に隣接しているため日雇い、季節労働者が多く幼い子供達は放任されがちでした。その社会的ニーズにこたえ、産院、母乳幼児健康診断所、授産所を設置し、疎開妊産婦（三百名）乳幼児 疎開学童（五百名）をうけいれ世話をした。

昭和二十年七月の空襲で全園舎焼失したが、復興に努力し戦災孤児を受け入れるとともに、海外引上げ、有子未亡人のために母子寮を創設して今日に至っている。家庭的背景の極めて脆弱な卒園児のためにアフターケア施設をつくる（昭和四十五年）とともに、宗教家は社会的責任として社会公益事業に積極的に寄与すべきものと呼び掛け続けている。

今日の家庭内養育教育機能の低下による少年非行に対処し、家庭児童相談室を創設（昭和五十六年）今では全国五十箇所以上になっている。

氏は温厚柔和で、優れた識見と判断力、初志を貫く実践力が、寛容で包容力溢れる人柄により慈父のようにしたわれている。

石井十次賞選考委員会

「石井十次賞」
正賞の楯

（石井十次の
ブロンズ像と
茶臼原憲法）

選考会の様子（東京赤坂プリンスホテル）

（保育所・乳児院・養護施設）

遠光寺参道

母子寮の玄関に立つ母子像

乳児院の子どもたち

平成10年4月11日の石井十次生誕記念式典に於いて、高鍋町内の小学校、中学校、高等学校の児童生徒の代表の皆さんが「石井十次先生の顕彰意見発表」をされたものです。
高鍋町内に小学校・中学校・高等学校各２校があり隔年毎に交代で行われております。

顕彰意見発表

「石井十次先生に学ぶ」

高鍋町立高鍋東小学校　５年　溝　内　　藍

今、私の住んでいる高鍋町でこ児の父、石井十次先生が生まれました。それは、100年以上も昔のことです。

私は、先生の生がいを本で知りました。そのなかで、自分と比べながら読んだのは、先生がまだ若く医学の道を歩んでいたころの事です。

先生がこ児を助ける道を志すきっかけとなったのは、病気の体を休めるために、岡山の上阿知に行ったことです。なぜ病気になったかというと、おぎ原先生にすすめられて、針灸師の仕事を始めたからです。りっぱな針灸師になるために岡山で勉強し、「学生針灸師」とよばれるほど人気者になりました。先生はそうよばれてがんばりすぎて、体をこわしてしまいました。

また、おぎ原先生のすすめで、クリスチャンになりました。このことで、困っている人をだまって見すごしてはいけないという考え方をするようになりました。

これらのことから、私は次の２つのことを考えました。

一つ目は、「人間は失敗をくり返しながら大きくなっていくんだ。」ということです。私ははじめ、先生は小さいころからこ児を救う道を志していたと考えていました。でも実際は、小学校の先生になったり医者になったりしています。その途中でいく度も病気になっています。その度にちがう道に進み、最後にこ児を救う道を見つけたのです。先生が行った行動が全てうまくいったわけではなく、いろいろな失敗をくり返し大きくなっていったのです。

私は、作家になること、カントリードールのお店を開いて母が作った人形を売ること、それから父と同じ自えい隊に入って医者になること、などたくさんのゆめを持っています。そのゆめをかなえるために、日ごろから物語や台本を作ったり、母がカントリードールを作るのを見ていたりしています。

なぜ作家になりたいかというと、幼稚園のころ初めてやった「かぐや姫」のげきが、とても楽しくて、私もこんな物語や台本を作ってみたいと思ったからです。また、カントリードールは母がしゅみでやっていて、とても上手だからです。

これらの夢をかなえるためには、これから十次先生のようにいろいろな体験を積むと思います。その中には、うまくいくこともあると思うけど、失敗や迷ったりすることもたくさんあると思います。そんなときでも、絶対にゆめをあきらめずに私の進むべき道を見つけたいと思います。

二つ目は、おぎ原先生との出会いです。おぎ原先生と出合わなかったら、十次先生の生がいは変わっていたかもしれません。私もこれからいろんな人に出会うと思います。その中には、私に一生を決める大切な出会いがあるかもしれません。だから、人の話をよく聞き、人の良いところを自分に取り入れていきたいと思います。

私の教室には、十次先生の絵がかざってあります。失敗をくり返し大きくなっていった先生の生き方を学び、私もゆめを大切にしてがんばっていきたいと思います。

「縄 の 帯」

高鍋東中学校　３年　猪　又　育　美

石井十次先生が行ったことで、私の心に一番残っていること、それは村で行われた祭りの時に起こったことです。縄の帯をしめていたためにいじめられていた友達をかわいそうに思い、お母さんが一生懸命織ってくれたつむぎの帯と取り替えてあげたことです。歌にもあり、話でも知っているお話ですが、石井十次先生のことというと、私はどうしてもこのできごとをあげずにはいられません。石井十次先生は、少年時代からずっとこんなにも人を思いやる心を持っていたのでしょうか。もちろん、心の中では、いろいろな考えがうずまいていたことでしょう。「自分自身がいじめられるかもしれない。」「大切な友達を助けたい。」特にこの二つの考えが激しく戦ったのではないでしょうか。そして、石井十次先生の心の中の戦いは、「友を助ける」側が勝利し、帯を取り替えるという行動をとったのでしょう。

今、私たちの生きているこの時代では、たくさんの忌まわしい事件が起きています。その中で、何人の人が目の前で苦しみ、悲しんでいる人に手をさしのべることができるでしょうか。残念ながら、私にはできないでしょう。なぜなら、先程述べた心の戦いで「恐怖」の側が勝ってしまうと思うからです。いじめを苦にして、自ら消滅を選んでいく人たちを見ているだけになってしまうかもしれません。今のこの社会を見たら、きっと石井十次先生は嘆き悲しむことでしょう。先生の目指した優しい社会の面影はまったくないといっても過言ではないほど、今の世の中は壊れてしまっているからです。

時が流れるにつれて、世の中は移り変わっていきます。いつかこの世界も変わっていくでしょう。そして、それは良い方向へと変わるのでしょうか。その新しい社会を作っていくのは、きっと私たちの世代です。私たちは勇気をもって、新しい社会を作っていかなくてはなりません。でも、私たちは、石井十次先生のように、一人きりで社会を変えることは絶対にできないでしょう。しかし、仲間がいたらどうでしょう。一人では運べない重い荷物も、二人、三人で運べば楽に運べるように、みんなが集まれば、きっと社会を変えていけるはずです。

福祉という言葉が、よく口にされるこの時代。これから大切なのは、「人を思いやる心、何かを実行する勇気」だと思います。高齢化社会だ、少子化社会だ、と強調される今、人々が一番大切にすべきものではないでしょうか。私たちは、石井十次先生の勇気を、心を、もう一度見つめ直すべきではないでしょうか。

The life of Juji Ishii

Takanabe-nishi J.H.S
Arata Omoto

「Juji Ishii was born in Babanoharu, Takanabe-town, in Miyazaki prefecture in 1865.」

石井十次先生は1865年宮崎県高鍋町馬場の原に生まれました

The life of Juji Ishii

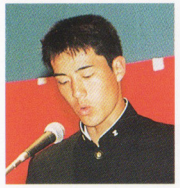
Takanabe Eest J.H.S
Kota Ishii

「Juji Ishii is someone whose name will long be rememberd in Takanabe-town.」

石井十次という名は高鍋町の人々にとって長く忘れられないものとして残りましょう。

給入りはがき贈呈、郵政省から尾崎理事長へ
(平成11年２月18日)

石井十次絵入りはがき発行
(平成11年２月５日郵政省)



「石井十次先生に学ぶべきこと」

高鍋農業高等学校　３年　　河　野　多加志

「人間らしく生きるとはどういうことだろうか？」私はこんなことを最近考える機会が多くなったような気がします。新聞の記事を読み、テレビのニュースに目を向ければ、毎日のように「中学生・高校生の犯罪事件」「銀行や企業の倒産に伴う失業者の増加」、「政府官僚の汚職事件」といった暗い記事が掲載されており、「これからの日本はどうなるのだろう……。」、「人間の優しさや温かさは失われていくのだろうか……。」といったことをつい考えてしまうのです。

しかしそんな時代だからこそ高鍋町の生んだ偉人である石井十次先生の業績は、より一層の感動を私達に与え、先の見えにくい21世紀を切り開いていくための力を与えてくれるのではないでしょうか。

正直言って私の石井十次先生に関する知識といえば、米沢藩主・上杉鷹山と並んで高鍋町の生んだ偉人の一人だということ、孤児救済にあたり「孤児の父」と呼ばれていることといった程度のもので、その詳しい業績や生涯については未知のものでした。しかし今回の発表にあたり、石井十次先生の60年の生涯を辿りながら、若き日のキリスト教への入信、前原定一少年との出会い、貴重な医学書を焼いて孤児救済に生涯を捧げようとする激しい情熱、体罰を廃した「対座の教育」、そして印刷機や幻燈などの最新技術を教育に導入する先見性……といった人柄に触れ、特に石井十次先生が孤児教育の重点を「自然とのふれあい」に置き、茶臼原の原野を開拓して農業教育を行われたことは、農業高校に学ぶ私にとって石井十次先生をより身近な存在として感じさせるものでした。

現在、私の家は畜産経営を営む農家です。幼い頃から家族と家畜の世話にあたり、農業自営者としての知識・技能を修得すべく高鍋農業高校の畜産科に入学してはや２年が過ぎました。その間、授業での実習や農業クラブ活動、朝夕の当番活動などつらいこともありましたが、動物達の世話を通じて生命の尊さを学び、真剣に取り組めば動物達は必ず応えてくれるということを確信するに至りました。なお高校卒業後の進路に関しては大学進学を考えており、最終的には家の仕事を継いで農業自営者を目指そうと考えています。

むろん今後の農業情勢は決して楽観できるものではなく、21世紀を生き抜く農業自営者となるためにはより専門的でかつ最新の技術を習得しなければならず、多くの困難や予期せぬ問題に突き当たることもあると思います。しかしそんな時こそ石井十次先生が幾多の困難を乗り越えて茶臼原の大地を開拓され孤児教育の拠り所とされた精神にのっとり、動物を愛する気持ちを忘れず、今後の畜産を担うにふさわしい農業自営者となるべく努力を続けていきたいと思います。そして私を見守ってくれる父母や兄弟、先生方をはじめ、今後の人生における多くの人々との出会いを大切にし、石井十次先生が示して下さった「人間らしい心」を失わないように生きていきます。

児童福祉の先駆者 石井十次

教育基本法や児童福祉法制定よりずっと以前の明治半ば、石井十次は、一人の貧しい子どもを拾ったことをきっかけに孤児の救済と教育に乗り出す。飢饉や貧困、戦争などで喪と別れなければならない子どもは多く、十次から捨てられた施設はわが国初の孤児院となる。彼は孤児たちから「お父さん」と慕われながら、延べ三千人の子どもたちを育てた。その志は、故郷宮崎県の茶臼原台地に建つ石井記念友愛社で今も生き続けている。

●孤児のために生きる決意

石井十次は、慶応元年（一八六五年）宮崎県児湯郡高鍋町に生まれた。父万吉は高鍋藩の下級武士で、農業で自給しながら藩に仕えた。西南戦争の折には西郷軍につき、田原坂の激戦にも参加。そのことも関係してか、十次は生涯西郷隆盛を敬愛した。

高鍋藩は「国家の盛衰は教育によって決まる」という理念のもと、藩主秋月種茂が安永七年（一七七八年）藩校明倫堂（後の島田学校・高鍋学校）を開設。以来、文教の地として知られる。世界初といわれる児童扶養手当を実施したのも高鍋藩だった。十次も幼いころに島田学校の教えを受ける。後の教育に対する基本姿勢は、高鍋藩の精神が根底にあった。

「教育院にして養育院にあらず」。

●石井十次の教育

孤児教育会設立の時から、十次は「社会に出て貢献する活力ある人材の輩出」を目指し、積極的に教育に取り組んだ。施設内に幼稚園や学校をつくり、能力があれば上級の学校にも進学させた。

最初は軍隊形式の塾舎制をとっていたが、明治三十八年ごろからはイギリスのバーナードホームにならって小舎制を採用。敷地内に一軒家を建て、当時は主婦と呼ばれていた保母一人に十数人の子どもを預けた。そこでは保母が子どもと寝食をともにし、世話をする。孤児院というより家族のような接し方だった。明治四十年ごろには、五十軒を超える家が敷地内に建っていた。

十次は新米の保母にはかならず一枚の紙を渡した。それには四角形が描かれ、その四隅には「不変不動主義」「児童中心主義」「早眠早起主義」「共炊共食主義」と書かれていた。そのどれが駆けても保母の資格はない。十次が考える、そして現代にも通じる「主婦（保母）の四角（資格）」である。

このほかにも十次は、「非体罰主義」「満腹主義」「宗教主義」「密室教育」「米洗い教育」など、十二の教育の原則を定めていた。

また、十次は音楽教育も取り入れた。明治二十六年、「風琴音楽隊」として発足した音楽隊は、明治二十九年、神戸から指導者を迎え本格的なブラスバンドとして活動を開始。日本全国を回って好評を博した。

先にも述べた通り、孤児院の運営資金は賛助員からの寄付金で賄われた。といっても多い時で一、二〇〇人もいた子どもたちを養うための寄付金が右から左に動くわけはなく、資金繰りにはいつも苦しんでいた。そんな十次の活動を理解し、あらゆる面で支えとなった多くの人々との出会いがあった。明治三三年の時点で、全国の賛助員は一万人を数えている。

●偉大な理解者たちとの出会い

中でも、倉敷紡績社長となる大原孫三郎（まごさぶろう）との出会いは運命的なものだった。明治三三年、十次と出会った時の孫三郎はまだ十九歳。

この出会いがそれぞれに与えた影響は少なくない。孫三郎は、「富の社会還元」「神から受けたものは神に返せ」を身上に大社会事業家になる。十次の人道主義が彼の人生を大きく広げたのである。

多くの理解者に恵まれ、いつも精力的に孤児救済に取り組んでいた十次だったが、その過労や心労に体は徐々にむしばまれていた。大正三年（一九一四年）一月三十日、十次は虎次郎・友子夫妻に長男が誕生したことを聞かされ大きくうなずいた後に息を引き取る。享年四十八歳。短いが、だれにもまねのできない偉大な一生だった。

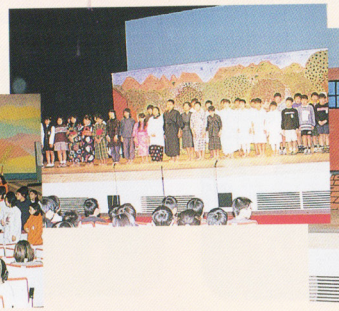
昭和二十二年（一九四七年）、太平洋戦争被災児の救済を目的に孤児院を再開したのは、奇しくも十次が死去した日に誕生した虎次郎・友子夫妻の長男児嶋虓一郎（こいちろう）だった。氏は、「石井記念友愛社」を設立。十次の遺志を継いで孤児救済に取り組んだ。

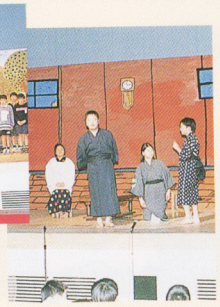
第8回

石井十次顕彰のつどい

児童劇「**縄の帯**」

平成十年二月七日





第9回

石井十次顕彰のつどい

児童劇「**最初の孤児**」

平成十一年二月六日

フラウエンコールなでしこの熱唱

石井十次英訳物語の贈呈
（中学２年生全員へ）
（高鍋東中、西中、木城中、穂北中、各校代表）

石井十次小伝の贈呈（５年生全員へ）
（高鍋東小、高鍋西小、木城小、石河内小、茶臼原小、穂北小、各校代表に）

第17回

石井十次生誕記念式典

平成十年四月十一日

児童福祉につくした人

このころ、生活に苦しむ人々のなかには、子どもを養えなくなる親もありました。しかし、政府の対策は不十分で、社会福祉も民間の慈善事業が中心でした。宮崎県出身の石井十次は、こうした子どもの救済に生涯をささげました。岡山で始まったかれの活動は、支援者を得ながら広がり、孤児や天災にあった子どもたちを全国から引きとり、その数は多いときには1,200名に達しました。かれは、宮崎の茶臼原原野に施設を移し子どもたちとともに開拓を行いながら、その教育に努めました。

- 中学校社会科の歴史教科書に掲載（平成９年4月）
- 全国4,500校の中学生が石井十次を学び始めた

東小学校と東中学校での道徳授業（石井十次先生を教材として）